



TITLE:

序文 ー文化相渉理論の形成をめ  
ざしてー

AUTHOR(S):

山室, 信一

---

CITATION:

山室, 信一. 序文 ー文化相渉理論の形成をめざしてー. 人文學報 2004,  
91: 1-7

ISSUE DATE:

2004-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/48652>

RIGHT:

# 序 文

— 文化相渉理論の形成をめざして —

山 室 信 一

本号は、共同研究班「文化相渉活動の諸相とその担い手」の研究報告を特集するものである。この共同研究班は人文科学研究所に設けられた文化連関部門における研究視角や研究対象、アプローチなどの固有なディシプリンが、いかなるものとしてあるべきかを文化相渉という専攻分野として立ち上げることを課題としつつ、文化研究というもののあり方を根源的に討議することから始めるという企図の下に2000年4月に出発した。しかしながら、それは制度が存在するゆえに、研究課題が外発的に与えられ、それを問題意識として意識していったという質のものでは、けっしてない。

この文化相渉論という研究対象と方法とを共に規定し創出していく、という課題を提起する意図は、あくまで20世紀最後の10年間の世界秩序の激変を視野に入れながら、私たちの眼前で展開し、さらに21世紀に入って加速度を増しているグローバリゼーションとローカリゼーションとの同時進行としてのグローカリゼーション（glocalization）という事態のなかで生じている文化現象を捉え、時空間の急激な変化を見通していくための研究領域の開拓と手法の開発が不可欠であると考えたことに困っている。もちろん、新たな研究領域も研究手法も無から生まれるものではない。そのため、先ずは長く人文・社会諸科学において進められてきた文化研究という方法そのものについて検討しつつ、そこから課題や視角について批判的に創出に向けて摂取していくという“創造的破壊”の姿勢が不可欠となる。この共同研究班が「文化相渉活動の諸相とその担い手」を研究テーマとして掲げたのは、そうした志向を共有していたためであった。

また、その前提としては、これに先立つ共同研究班における討議の積み重ねとそれらの報告書である山室信一編『日本・中国・朝鮮間の相互認識と誤解の表象—国際シンポジウム：討議集』（京都大学人文科学研究所共同研究資料叢書・第一号、1998年）や古屋哲夫・山室信一編『近代日本における東アジア問題』（吉川弘文館、2001年）において、さまざまなテーマの下で描き出され、あるいは課題として遺されていた東アジアにおける文化相渉現象とそれが

近代の東アジア世界に惹き起こした政治的・経済的・文化的な軋轢や交流の歴史的な意味をもう一度、理論的に再検討し、新たな理論枠組みに組み換えていきたいという問題意識の継承が課題となっていた。

こうした課題を受け継ぎつつ、「文化相渉」という研究分野を設定していくということは、当然のこととして、これまでの人文・社会諸科学において提起されていた「文化」概念を、そのまま受け容れるのではなく、新たな概念規定を求めていくことが必要であるということを強く意識するものでもあった。とりわけ、その概念が民族という血縁や国家という地縁の枠のなかで捉えつづけられてきたという特質をもつ「文化」を、そこから解き放つことが何よりも重要な課題となった。つまり、この共同研究においては、文化とは何か、という定義づけから出発するという演繹的なアプローチを取るのではなく、様々な主体の交渉の結果として生じる事態・事象を捉えながら、そこから文化とはなにか、誰が文化を産み出していくのかを帰納的に析出していくというアプローチを採っている。すなわち、文化についていかに定義するにせよ、多くの人々が暗黙の前提としているのは民族と領域すなわち「血と地」に規定されることによってそれぞれの文化の固有性が決定してくるという想定であろう。それは文化のありかたをその主体と環境との関連性において捉えるということを意味する。しかし、実は環境としてあるはずの空間と民族とは、歴史的に固定されてきたわけではない。むしろ、人が空間を移動していくことはその量の多寡はともあれ、間断なく続いてきた常態であり、それゆえに民族も固定的にある空間と一義的に結びつけられうるわけではない。

そうであるとすれば、文化とはなにか、をアプリアリに設定するのではなく、むしろ自明で既存のものとして理解されがちな文化概念そのものの再概念化を図ることに課題を据えるべきではないか、ということからこの共同研究は始まっている。なぜなら、文化という概念やその把握の方法には、空間的にも歴史的にもいくつもの意味的断層が含まれており、それをひとつの概念に封じ込めてしまうことは、却ってその本質や機能の多様性と多義性を圧殺してしまいかねないからである。それでは豊饒な研究の沃野であるべき対象を不毛の地に変えてしまうことになる。

このような前提と問題意識に立って、本共同研究では文化について、予めその内実を規定することなく、まずは人と人、集団と集団とが遭遇し、衝突し、交流していく中で、そこで生じた事象や現象から文化とは何かについてみていく、という方法を取った。そうした文化相互の交渉の態様と歴史性についての解明という作業は、さらにはその担い手の解明へと進んでいかざるをえないという必然性を孕むことになる。その担い手の問題は、研究会においては外交、移民、難民、留学、観光、視察、探検、布教などの他、戦

争や亡命、抑留、漂流などの文化交渉の諸局面において扱われただけでなく、調査機関・研究団体や商社などの企業体、商工団体、居留民団、国際学会、NGO、NPOなどの組織に関連して、あるいは印刷物、映画、歌、演劇などのメディア、ピジンやリンガフランカなどの跨境民族における「共通語」の問題などの多岐におよぶ課題を設定して報告と検討を重ねることを要請するものであった。そのうち、調査・研究団体については、それらが何よりも現地に赴いて調査活動を繰り広げ、またその調査結果に基づいて人の交流が促されただけでなく、物財の交易・流通を促進することによって、まさに文化交渉貿易（Cross-cultural trade）という機能をもったという関心から、また文化についての過去の業績に関する様々な資料の所在を知るための方途として各種調査機関とその成果に着目し、東邦協会・東亜同文会・殖民協会・台湾協会・南洋協会・日印（インド）協会・日比（フィリピン）協会・満鉄調査部・東亜経済調査局・東亜研究所・太平洋協会などで集積された調査報告を共通の研究対象として採り上げていった。それはまた、これらの調査機関・研究団体の活動分野が多岐に及ぶため、その活動の分析に当たっては多くの専攻分野の研究者を揃えた共同研究の対象として適恰的であったという理由もあった。

こうして多種多様な複数の主体の交渉によって産み出される事象として、文化を把握していこうとする志向は、これまで自明のごとくに見なされてきたような文化の固有性と純粋性とを根拠として成り立つと想定されているアイデンティティ論、あるいはそれを基にして産み出される民族観、さらにはその政治的発現としてのナショナリズムの正統性根拠についても再考していくための端緒となっていくのではないか、という理論的仮説に立って文化現象を捉える試みにも繋がっている。同時にそれは異界や異人との遭遇によって生じる世界観や他者認識の心性史への着目、あるいは国内政治と外交とを関連づける政治力学と文化との関係、植民地という民族混淆社会における民族と政治と経済との相互関連、さらには交易活動が産み出す消費生活や幸福感・価値観の変容などの様々な次元の問題を文化現象の対象として捉え直していくことを意味する。

そもそも、私たちが想定する文化相渉という研究分野は、第一に、文化はその生成、移転、変容という一連の過程のどの局面においても、決して孤立して存在するものではなく流動性をもつ、という立脚点から発想する。それはまた、地球上に限りなく存在している相互に異なる文化がそれぞれに独自に固有の価値をもつことを認めつつ、しかし、それらが交流しあうことによって生まれるトランス・カルチャーにも価値を認めるということに他ならない。そのため、文化相渉研究は特定の時期における文化の優劣を前提にして、優位性を持つ文化があたかも水の高き所から低き所に流れるというような想定に、絶対に立つものではない。本研究は、あくまで過去、現在、未来を繋ぐ終わり

無き文化相互交渉の連鎖過程のなかで生まれる現象に見られる特性と実態をダイナミックに捉えることを課題とするものである。しかも、ハイブリッドな異種混交としての文化が生まれ出るにあたっては、その咀嚼、受容した側面とともに、排斥、反発された側面とをともに複眼的に見ていく視点が不可欠となるのである。

しかしながら、第二に、より重要なことは、文化相渉研究においては単に空間的に離れたものの諸文化間のつながりの態様のみを対象に限定するのではないということである。というよりも、文化とその他の人間の諸活動・営為とのつながりもまた重要な問題領域として設定されていることが、より強調しておきたい点である。そこでは文化と生産・消費などの経済活動とそれを支える貿易活動、文化と国内政治や外交との関連、文化と学知、芸術、芸能との関連など問題領域は、その課題意識と視角の取り方によって、いかようにも多様な広がりをもせていくはずである。なぜなら、文化とは政治、経済、芸術、芸能などの領域で発現してくる事象であるとともに、それらが社会生活における他の領域との相互作用のなかで産み出されてくる現象として文化を捉えることができるからである。その意味で文化は社会的な構築物であるとともに、観念ないしイデオロギーとしても作用し、他の社会生活を規定する重要な要因となる。

そのことはまた、第三に、あるひとつの文化を採り上げて対象とする場合でも、その文化の特性を自然環境、生業・労働、人間形成、宗教や信条などのそれぞれの要因によって規定されるタイプの析出とそれらの相互関連性を明らかにしていくというアプローチを採るということ、そして文化の伝達様式でもあり、構成要素でもあるコミュニケーション様式やメディアの態様をその特殊性とともに明らかにすることを課題として浮かび上がらせることになる。テクノロジーもまた社会的・文化的力によって形作られるし、そのテクノロジーがまたメディアとコミュニケーションの様式を規定していくという双方向性をもっているからである。すなわち、文化交渉の担い手がいかなるメディアとコミュニケーションの様式に規定されていたかを社会的・歴史的なコンテクストのなかで読み解かないかぎり、その文化交渉の特殊性を理解できず、そうした作業を欠いては文化交渉の普遍性についての理論構築も砂上の楼閣に終わらざるをえないであろう。文化をいかに定義するかという問題を、今は措くとしても、それが基本的には、いかなる価値観やスタイルを持って暮らしていくのかという生活様式の現れである以上、政治や経済や軍事などもその文化を離れては存在しないだけでなく、逆にそれらも文化を支える手段に過ぎないともいえるからである。このようにある領域における文化を複合現象という相において捉えるということは、具体的にはメディアにおける活字、写真、映画などの領域を越えて複合的に現れるメディア・ミックスと呼ばれる現象などを想起さ

れるであろう。

こうして、文化相渉をめぐる共同研究は、空間的な境域を越えた文化の研究を対象とするだけではなく、経済と文化、政治と文化など文化が他の人間の社会的活動とどのような連関をもって展開していくか、という文化の他領域との関連性についても研究対象とすることとなった。人の流れを研究対象とするのも、社会的な行為者によって固有の文化が維持され、担われ、文化移動としての越境現象を起こしていくことに注目するからに他ならない。いや、むしろ担い手の活動の実相や意義を明らかにすることなしには、文化相渉の諸相も明らかににはなりえないであろう。その意味では、文化相渉とその担い手の解明は、ひとつの事実の両面をなすものであり、一体のものとして表出されてくることになる。文化が人間と人間、人間と自然、人間と社会との交渉活動である以上、その接触や背反のなかにおいて必ずや習俗や行動様式さらには感性・心性、観念体系や価値観における、なにがしかの変容が生じるものであり、それらを巨視的ないし微視的に見つめ直していく作業から着手する必要があった。

以上のような問題意識と課題とを共有したうえで、私たちが目指したのは、なにが起きたのかという出来事を当該の社会や時代に見出し、それが本来属していたシステムのなかで現れていた形相や存在意味のレベルの違いを明らかにすると同時に、それらの出来事を社会や時代を超えて結び合わせ、そこに相互に生み出されてくる関連性を独自の視角から再構成してみることであった。しかし、そこでは決定論的な見方を取ることは避け、不安定な連鎖と永続的な流動・変容の可能性を内包させた暫定的なものとして事象を把握していくということに留意した。そして、こうした課題を遂行するために既存の学問分野や領域、手法を可能な限り、自己内破しつつ、可能な限り異なった領域に架橋していくことを試みた。また、議論のなかで要請されたのは、既存の見方や評価軸に依存して対象をみるのではなく、これまでの人文・社会諸科学において基本的なカテゴリーや概念として疑われることがなかったことがらについても、根底的な疑いの眼差しを差し向けるということであった。例えば、文化におけるハイカルチャーないしエリート文化と民衆文化、創造と模倣、外来と土着、近代と伝統などの区分軸についても、その配置や対比のしかたがもつ含意についても、けっしてそれを自明のものとせず、それらもまた嘗ての人文・社会諸科学が自らの研究対象を立ち上げるにあたって用いてきた方法的仮説にすぎないものであり、これらのカテゴリーそのものが時代や環境が生んだ歴史のカテゴリーであり、それらは一時的に画定され通説化された歴史的産物であり、何よりもその研究対象の変化によって、たえず変わり行くものであることを前提とするという立場を取っている。

しかし、ここで鍵概念として私たちの共同研究を繋ぐ絆となっている「文化」は、その定義を帰納法的に確定していくという前提をとった方法論の、当然の帰結として、論者によって意味内容やその範囲が定めがたいという性格のものとなっている。そのことは曖昧さや多義性を免れない。だが、そのような危険性を孕みつつも、まさしくそのことによって大いなる可能性をもっていることに、今は望みをかけておきたい。この研究は冒頭に述べたように、文化連関部門における研究視角や研究対象やアプローチの固有な方法とは、いかなるものとしてあるべきなのかを確認するという企図から発しているが、直接的にそれに答えるよりも先ずは文化相渉の諸相を明らかにし、それにより文化連関における形態連関・意味連関・作用連関などのカテゴリーを析出していくための予備作業とするものである。

すなわち、私たちがここで目指したことは、既存の文化という定義を自明の前提とし、そこから問いを立てて解答を導くことではなく、何よりも文化とは何かと問われた場合に、ある現象がいかなる意味で文化であると言えるのかを、問いとして差し出し、文化が生まれてくる現場や局面の実相を先ずは描き出して見ようというものであった。その意味では、ファクトファインディングや解答賦与よりも、問題発見と課題索出に焦点を当てることに、この共同研究の力点は置かれている。そうした方針が貫かれたのは問題そのものを捜し出していく過程こそが、既存の見方に疑問を呈し、通説に異論を唱えていくための確かで不可避の方途であるという合意があったからに他ならない。その合意を最大限に尊重すべく、本号に寄せられた論稿は、解答を目指すのではなく、それぞれの研究者が新たな問題領域を切り開いていくために、あるいは新しい対象を選び出したり、あるいはその対象間の関係に光を当てたり、あるいは全く違った専攻分野のディシプリンを学んで自らが修得してきたそれらとの接合を試みたり、という試行錯誤を繰り返すなかで結実してきたものとなっている。その結果が当初に意図していた課題にどれほど応えたかは、読者の方々のご批判に供する他はないが、それらが従来の研究からは、明確に一線を描くという試みと意欲に支えられたものとなっていることは看取戴けるものと思料している。

そして、敢えて付言しておけば、こうした「文化相渉活動の諸相とその担い手」を研究していくということは、取りも直さず、私たちが常に自己言及と自己反省を迫られている、学問や理論や観念そのものが、差異をもったものの接触や交渉のなかで、いかに受容され、変容していく伝達経路の網の目のなかで創出され、模倣されていくものかということを顧みることには他ならない。それゆえに、そうしたプロセスを意識的に究明していくことは、学問研究という文化相渉の場そのものに身を置き、その一端を担ってい

く主体としての私たちの存在様態や存在理由を問い直していくという作業として現前に広がっていることを強く意識し続けなければならないという自省を、私たち共同研究班員に等しく迫るものだったのである。

本来、この共同研究の成果は、2002年には公刊する予定であり、それに合わせて原稿を提出戴いた方には、折角の論文のプライオリティを損なうことになってしまった不手際を衷心からお詫び申し上げたい。また、公刊が遅延したために、他の雑誌などに発表された方もあり、本特集号には掲載しえなかった論稿もある。いずれにせよ、本号には寄稿されなかった方を含めて、この共同研究に参加戴いたそれぞれの方が今後違う形ではあれ、その成果を発表されていくことによって「文化相渉活動の諸相とその担い手」という研究分野の全体像が浮かび上がってくることになるであろう。

なお、この共同研究においては、前述したように調査機関・研究団体の活動について、共同調査を連続的に行ったが、その資料調査に当たっては小樽・彦根・山口・大分・長崎などの旧制高等商業学校の図書を受け継いだ図書館や北海道大学図書館・同農学部図書館や東京大学東洋文化研究所図書館・同経済学部図書館、大阪市立大学学術情報総合センター、国立国会図書館さらに各地の商工会議所資料室・図書館などに閲覧や資料複写などの便宜を図って戴いたことに対し、この場を借りて御礼申し上げておきたい。ご厚配、まことに有り難うございました。

言うまでもなく、私たちのここでの作業は、全般的な文化現象の把握方法に向けての最初の、ささやかな、しかし確実な第一歩を刻したものに過ぎない。そのため、いまだ問題提起に終わっている部分も少なくないかもしれない。

しかし、ここに集った人たちによって、これを礎石や跳躍板としながら、遠くない将来において、必ずや新たな知の地平が切り拓かれ、それぞれが本格的な研究書として纏められていくことを信じて疑わない。